亞炭香報

発行所
亜炭広報社
編集人　伊達伸明

第六号

平成二十六年
三月十五日

亜炭山再見プロジェクト

追憶のカンテラ、またたく

証言紡いで風景再構成

本紙4号で「亜炭と暮らしのアンケート」を掲載し、消費者側からの記憶の掘りおこしを行なったが、これによってまた新たな情報が寄せられ、生産者として亜炭・埋木の仕事に関わった人々への聞き取りや関係資料の再発掘などが実現した。今号ではその一端を紹介し、鉱山風景の再現を試みる。

宮城から山形 半世紀の坑跡

坑口～本坑～片

宮城県下の亜炭鉱山数は、生産がピークをむかえた昭和19年で300前後、仙台市内でも40～50ほどあったというが、その規模は、社員数十人をかかえる大企業から2～3人の零細坑まで差が大きかった。しかしいずれも、まず山肌の一部に坑口を開けて地中へ掘り進み、炭層に到達したら徐々に掘り広げていくという手順に変わりはない。亜炭層自体は宮城・山形を含む広域にあって、どこを掘っても当たるとも言われるが、露頭が確認しやすい崖面や切れ込んだ沢の奥などの候補地から、積み出し道をつけやすい場所が最終的に選ばれる。定められた期間内に試掘して条件を整え採掘権を取得すれば、本格的な採掘の開始。最初に山に鎚（ツチ）を入れる際には碑を建てて山神様を奉る習慣があったというが、稼働中の鉱山の権利を手に入れて新規参入する者も多く、必ずしもこの手順通りとは限らなかったようだ。

坑口は高さ約1・5メートル、幅2～2メートル30センチほど。一定距離を掘り進むたび内側に直径20センチ弱の丸太で木枠を組んで補強する。この最初のトンネルにトロッコ軌道や電気配線・排水管などが敷設され、大動脈ともいうべき本坑となる。

炭層の厚さは、20センチ程度から1メートルを超える分厚いものまで鉱区によって異なるが、採掘は横方向に広がるこの層を追って本坑から分岐していく。こうして新たに作られる枝坑を「片（かた）」といい、左右に何本もの枝坑を持つ炭鉱では、それらを左2片、右6片などと呼び分ける。片を掘る際も亜炭は採れるが、最先端の現場はそこからさらに枝分かれした「切羽（きりは）」。ここは這って入る以外にない狭い袋小路だが、坑夫はその中で手元をカーバイトランプで照らして採掘する。

上部の岩盤を支える支柱と残柱亜炭（左）

切羽は灯り一つ

「亜炭を取った後の面がテカッと光る『ナメハダ』だといい層なんだ。砂がくっついた『焼きハダ』の層ははがしにくいからダメ」。仙台市の芦ノ口炭鉱などで長く坑夫を務めた荒照男氏（80）は、手掘りならではの苦労と見極め方を語る。まず炭層と接する下層との境目付近にメノシタと呼ばれる道具でスキマを作り、次に炭層上部にバールや金矢釘を打ち込んで板状の亜炭をはがして落としていく。次にどの方向に掘っていくかは自分の判断なので「層のつながりを読むのが大事だった」。

荒照男氏

場所によっては戦後までこうした手掘り中心の採掘が行なわれたが、徐々にツルハシに代わってコールピック（圧縮空気で作動するドリル状の工具）、神楽さん巻きと呼ばれる人力での巻き上げ作業に代わって電動ウィンチが導入され、生産効率が飛躍的に向上した。

作業は常に落盤の危険と隣り合わせだ。ランプ一つの環境下では聴覚に頼るところも大きく、特に土圧で常に圧縮されてきしむ坑木の音に注意を傾けるため、歌や口笛は御法度。中には、微細な異常音を鋭く察知できるため、きしまない鉄枠よりも木枠の方がいいと言う坑夫もいる。

坑道が細かく分岐しても層のレベルは同じなので、掘り進むうちに元の坑と合流し、次第に網目状になる。坑道を広げ、網の目の部分の炭を採り終わると、一部を陥没防止用に残してその鉱区での採掘が完了する。これは残柱式採炭法と呼ばれるもので、三本木亜炭記念館にある大炭柱も、そうしたものの一つである。

カーバイトランプ

職場のひとびと

作業は、採掘する坑夫と後方で亜炭をトロッコに積む後山（あとやま＝車夫とも）の2人組で行なう。満杯になった亜炭は、坑外に事務所や倉庫などと並んで建つ選炭場へと運ばれ、坑夫ごとに採炭重量を計測したのち、純度の低いズリなどを取り除いて一定の重さに袋詰めされる。会社運営の場合、坑夫の給料はこの記録からの出来高払いだが、一人親方が口契約で働くような零細坑では、買付け業者と直接取引する場合もあった。昭和27年の照越炭鉱（築館）では1日150貫目（600kg弱）を20日掘って、当時の農協の初任給の倍近い3000円の収入になった。

体力が資本の重労働ゆえ坑夫は男性の仕事だが、後山には女性がつくこともある。朝、入坑の際にその日の後山を指名して契約する。10代のころ越路の石倉沢炭坑で後山として働いた女性（83）は、「生い立ちやうわさ話などを話しながら仕事できる人もいた」と当時を振り返る。

選炭場もおもに女性の職場。家族ぐるみで亜炭山勤めという時代があった。

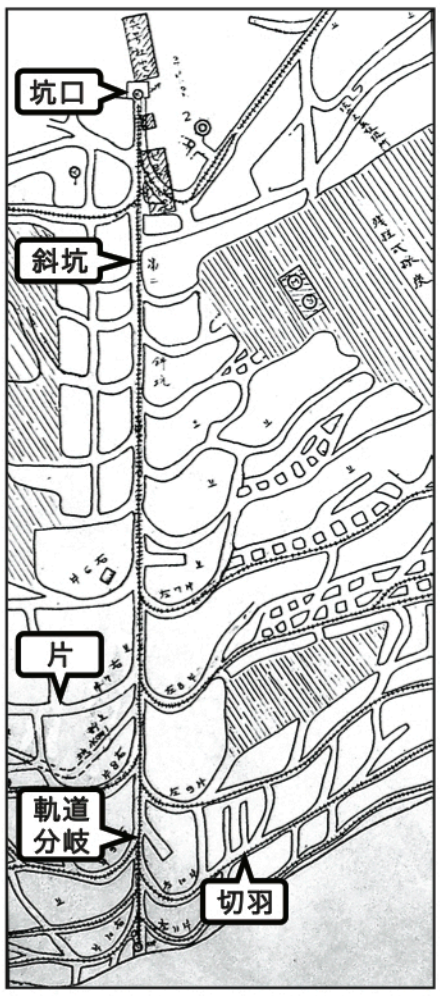
亜炭鉱山の様子

現存するいくつかの資料を組み合わせて、亜炭鉱山の内部の様子を再現した。ストロボ撮影のため全体が明るく写っているが、実際はカンテラの灯り一つの暗闇だ。

坑口　トロッコで亜炭を積み出す女性（仙台市歴史民俗資料館所蔵）

軌道分岐点　左側直進下り方向が本坑　右方向が片（中山啓氏所蔵）

切羽での作業風景　頭上の亜炭をはぎ落とす（山形県亜炭協会「亜炭のしおり」より）



坑内模式図（三本木若瀬炭鉱 保安図S34より）
トロッコ軌道と坑道の配置を示す上面図。軌道は坑口から図の下方に向かって斜めに下る

「踊る」亜炭、栄えた町

舟形町・中山炭鉱

本年度の「亜炭香古学」パンフレット裏表紙の「亜炭層と2人の坑夫」の写真は、中山炭鉱（舟形町）の切羽の風景である。元社長の中山啓氏（89）は、昭和21年から38年間亜炭採掘にたずさわり、父の代から受け継いだ山を東北指折りの大鉱山へと育てた。氏は比重の差によって自動的に選炭する重液選炭法の研究論文を発表しプラント化する一方、全国亜炭鉱業協同組合の理事長として、石炭に比べて不十分だった国の亜炭業界への振興策の拡充を要求し、衆議院小委員会を設置させるなど力を振るった。

多くの従業員とその家族を抱える中山炭鉱では、道路整備や学校建設、交通網の整備など、地区の生活施設の充実にも積極的に貢献、地域の基幹産業の要として一時代を築いた。

坑道内の様子を語る中山氏

亜炭を未来へつなぐ
日豊鉱業株式会社
事業所
武蔵野鉱山　埼玉県飯能市大字阿須
飯能市～入間市にまたがる加治丘陵地帯の亜炭鉱山
金成鉱山　宮城県栗原市金成千谷沢

亜炭香報は、地域資源を再発見するアートイベント「亜炭香古学 2013」《企画制作／伊達伸明，主催／仙台市，（公財）仙台市市民文化事業団（事業課 022-301-7405）助成／(財)地域創造》の活動の一環として発行されています。

本紙の編集及び「亜炭香古学」開催にあたって下記文献を参考にしました。引用資料として書籍広告風に掲載し、謝意と敬意を表します。

松浦丹次郎
阿武隈川の埋もれ木
―まぼろしの銘木の歴史と文化―
●定価 2000円　A5判174ページ　カラー
発行　平成21年11月18日
発行所　土龍舎（代表　幕田今日子）
960-0755 福島県伊達市梁川町字中久保39-3
TEL/FAX: 024-577-6431
印刷　シーアイエー株式会社
960-0719 福島県伊達市梁川町やながわ工業団地90-1
TEL：024-527-2790　FAX：024-527-2029

仙台市内の懐かしい写真満載
忘れかけの街・仙台
～昭和40年頃、そして今～
定価1890円（本体1800円＋税）
仙台はこんなに変わった！　東一番丁や青葉通などの市街地から生出、今市など郊外まで105の街の今昔を、昭和40年ごろと最近の写真で見る。街の歴史をつづった文章とともにノスタルジックな世界にいざなう。
河北新報出版センター　編集
発行日　2005年4月25日　第1版
発行人　及川光弘
発行所　河北新報出版センター
仙台市青葉区一番町1-14-35
河北新報総合サービス内
印刷所　(株)東北プリント

『名取川埋木』と『青葉山埋木』は性質上、異れり
今日は『名取川埋木』殆ど少なし
大正三年五月廿三日發行
仙臺藩祖時代
實業一斑
價代金貳拾錢
著者兼發行者　矢野顯藏　仙臺市北鍛冶町九拾壱番地
印刷者　佐藤三之助　仙臺市表小路壱番地
印刷所　宮城活版社　仙臺市表小路壱番地　電話二一五番

東北の工匠
毎日新聞社 編
「みちのく」の風土が育てた伝統工芸。そこに息づく工（たくみ）の生きざま。何百年もの間、父から子へ師から弟子へと伝えられてきたこの「灯」。
定価９８０円(絶版)
発行：毎日新聞社　100 東京都千代田区一ツ橋
印刷・製本：大阪高速印刷
1979年12月初版　262ページ

昭和四年発行
日本地理風俗大系　第4巻
関東北部及奥羽編
80年前の日本各地の名所旧跡・街頭風景、生活風俗を圧倒的な写真資料とともに紹介する好著。全18巻のうち本書はその巻4。
発行所　株式會社　新光社　東京市神田區錦町一丁目一九番地　電話　神田　〔〇四七一番　四三三九番
編輯者　仲摩照久　東京市神田區錦町一ノ一九
印刷所　共同印刷株式會社　東京市小石川區久堅町一〇八

※連絡先等の引用は奥付のまま